

---

# ヒマワリ

RAIN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒマワリ

### 【Nコード】

N4145D

### 【作者名】

RAIN

### 【あらすじ】

とある理由によって田舎から、都会の学校で寮生活をするようになった、小春ひなた。全く空気のちがう学校生活、不安な寮生活、  
・  
・  
・そして友達。でも、あきらめない。いてもいなくても同じ。陰が薄い。そんな自分を変えるために……

## プロローグ

青い空の下で、ひまわりが揺れていた。

太陽が眩しい

セミの鳴き声がする

真っ黒な服を着た私は、真っ黒な服を着た叔母さんに手をひかれて歩く。

空には、わたがしのような入道雲がうかんでいる。

青い空の下で、ひまわりは 笑ってた。

叔母さんに手をひかれてやってきたその場所は、私と同じ黒い服を着た人で  
いっぱいだった。

みんな 泣いてる

ここがどこかは わからない でもこ  
こにはいたくなかった

木でできた箱をのぞいた 菊の花の匂い  
眠っている

『・・・お父さん・・・お母さん・・・』

ここにるのが嫌になって、外へとびだした。外はひまわりでいっぱいだった。

お父さんに肩車してもらって歩いた ひまわり畑

お母さんが きれいね と笑った ひまわり

背の高いひまわりは、空を見上げてる。  
そんなひまわりを私も見上げてた。

……ヒマワリ……

ヒマワリは どんな香りがするんだろう？

小さな私は 見上げることしかできない。

……目をつぶって大きく息を吸いこんだ……

## 第1話：都会へ

とろんと甘い香りがした。眠ってしまいそうなほどに甘くて、いい香りだ。

・・・ヒマワリってこんなに甘い香りがするの・・・

しかし、そっと目をあけると・・・そこはヒマワリ畑ではなかった。

ガタゴトと席が揺れる。前の座席には、スーツ姿で新聞を読む男の人、

化粧をバツチりきめた女の人が座っている。ドアのそばには、私と同じ中学生ぐらいの

女の子たちがおしゃべりしている。ここは電車の中だ。・・・いつのまにか眠っていたらしい。

（・・・あれは夢だったのか・・・）

しかし、あの子の眠ってしまいそうな甘い香りは、まだここにあった。

・・・ドアの方、女子中学生の方からだ。甘い香り、それは香水の匂いだったのだ。

（・・・ここでは、子供も香水つけるのか・・・）

ふと、そう思った。でもちがうのはそこだけじゃない。次に目にとまったのは、服装だ。

ブレザーに、少しゆるめた赤いちょうちよ結びのリボン、スカートは膝より上。いかにも都会らしい格好だった。

（・・・いいなあ。私もブレザー着てみたい・・・）

わかっていながらも、自分の服装に目をやった。セーラー服に襟とスカートは紺色。スカートのような赤いリボン・・・前の学校の制服。それなりには可愛いけれど、ブレザーの方が好き。・・・なにより都会って感じがしていい。・・・私には。

私は、小春 ひなた。田舎からこの大都会へ1人でやってきた。新しい中学校へ行く途中

だ。しかも私はこれから1年間、その中学校の寮にはいつて生活しなければならぬ。

なんで寮に入るのかって？ それは・・・実は私、小さいころに交通事故で両親をなくしてしたんだ。だからもともと田舎に住んでた叔母さんにひきとられて暮らしてたんだ。いままではね。2年くらい前かな。叔母さんにあかちゃんができたことを私は知った。

叔母さんには子供がいなかったから、私も叔母さんもとてもうれしかったんだけど・・・

あかちゃんが生まれたとたん急にいそがしくなった。叔母さんは毎日、毎日、あかちゃん の世話でいそがしそうで・・・いまさらながら、自分のことが邪魔になるんじゃないかな

・・・なんて思いました。もちろん叔母さんはそんなこと一度だつていったことはないし

わたしのことは、とてもかわいがってくれているけれど・・・私だつていつまでもあま





## 第2話・出会い

もう、どのくらい歩いたんだろう・・・？歩いても歩いてもたどりつかない。

一歩一歩、足取りが重くなってきた。・・・希望に満ちた旅立ちだったはずなのに。

自分を変えたい。その一心でここまで来たはずなのに。・・・わかってる。わかってるけど・・・

地面は冷たい灰色。コンクリートでできた建物もおんなじ灰色。数えきれないほどの車の

数。あたりは人、人、人。人であふれ返っている。・・・異世界・・・そう。

ここは、東京と言う名の異世界なのだ。

それでも、進んで行くと、人気のない路地に出た。ひなたは、重い足を引きずるようにして、その路地を進んだ。

・・・その時だった・・・

ふわりと小さな白いものが足元におちた。何気なく足元を見てみると・・・

「・・・あ、・・・」

・・・それは小さな桜の花びらだった。白に見えたその花びらは、よく見ると薄いピンク色。つまり、桜色だった。この色を桜色というのだと改めて実感したひなただった。

「……桜……こんな所にも咲いてたんだ……」

見上げると、なんと、見事な桜並木がそこに広がっていた。

「うわぁ……」

そうだ。下を向いても仕方がない。私は……自分を変えるために……新しい自分になるためにここへやって来たんだ。ここからがんばらなくちゃ。……うん。

ふわふわと空を舞う桜の花びらが、ひなたの重い心もふわふわと軽くして、空と一緒に舞った気がした。

そこからは簡単だった。軽い足取りでどんどん進んで行った。桜並木は、学校までずっと続いていた。……それもそのはず。なぜならここは……

「あれ……？ここ……どこだろ？」

ひなたはあの桜並木の中をまださまよっていた。もともと方向感覚には自信がないのと、

学校への地図を全く理解できていないのとさらにさまよってしまう結果になっているのである。こうなったら誰かにきくしかないだろう。……でも誰に……？

こんな人気のない場所に人なんかいるわけが……

……その時、ひなたの目に、桜並木の道をほうきで掃いている人がうつった。

(・・・そうだった！あの人に道をきけば・・・)

知らない人に声をかけるのは少し気がひけたが、勇気をだしてきいてみた。

「すつ、すみません・・・あのぉ・・・」

声をかけられた人は、ほうきの手を止め、ふりかえった。

「・・・はい。なんですか？」

ふりかえったその人は、ひなたと同じくらいの人で、赤いチエツクのスカートとリボン、

紺色のブレザーの下にクリーム色のセーターをきているのがわかる。学校の制服なのだろ　う。制服をきた人なら電車でもみかけたけれど、雰囲気がぜんぜん違った。きちんとふた　つにしばった髪、ひざがかくれるほどのスカートの丈、崩していない制服。優等生。そんな　な雰囲気のただようその人は、美少女。その言葉に嘘がないほど美人だった。

・・・相手がそういう人だったのでかえって余計に緊張してしまつた。しかし、勇気をだしてきいてみた。

「・・・あつ、あの・・・桜並木中学校ってどこにあるか教えていただけます・・・か？」

「桜並木中学校ですか？」

「・・・あ、ああ、はい！そ、そうです。」

「でしたら、桜並木中学校はこの学校ですよ。」

制服姿のその人はやさしそうに、にっこり笑った。

「あ……え……？そうなんですか？」

……そう。ひなたがずっとさまよっていたこの桜並木の中こそ、ひなたの目指す学校

だったのだ。「桜並木中学校」ならわかってもいい気もするが……

「はい。……あ、もしかして、転校生？」

「え？な、なんでわかったんですか？」

「それは、その様子を見てればわかるわよ。」

「え、そ、そうですか？」

笑ったのにつられて、ひなたも一緒に笑ってしまった。

「……あ、そうだ、転校してきました小春ひなたです。よ、よろしくおねがいします。」

「あら、こちらこそ。私は桜木愛。わからないことがあったら色々」と

きいてくれたらうれしいわ。」

「あ、ありがとうございますっ！」

「そんなに力入れなくてもふつうでいいわよ。 . . . そうだ、  
小春さん、私が教室まで案内するわね。」

「ありがとうございます。 . . . 桜木さん。」

そう言うと二人は校舎の中に入って行った。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4145d/>

---

ヒマワリ

2010年10月11日22時35分発行